

サーチライト With Pastor Jon 創世記 1 章 パート 1

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するのを感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル 4 : 7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rumi

Genesis (創世記)。

Genesis (創世記) という名前の意味は、まさしく「始まり」

創世記には全てのものの始まりが書かれています。

被造物の始まり、罪の始まり、家族の始まり、文化や産業の始まり、そしてヘブル民族の始まりについて。

すなわち私たちに想像できる全ての物事の始まりについてです。

ただし…ただし、ただし…。唯一の例外は、神の始まりについて。

なぜか？ それは、神には始まりがないから。

神には始まりがなく、終わりもない。

だから、聖書の一番初めから、神はご自身の存在については一切説明しておらず、私たちが、神の存在は当然の事実として理解していることを前提に書かれています。

聖書は神によって書かれた“神の自叙伝”です。

あなたが自叙伝を書くなら、何ページも費やして自分が存在した事実を説明しますか？ 恐らくしませんね。自分について書く時、何ページにもわたって自分が存在したことを証明する人はいないでしょう。

自分の存在を証明しようとはしないでしょ。

なぜなら、あなたが本を書いていること自体が、あなたの存在を証明しているから。

聖書を学べば学ぶほど、更にはっきり確信すること、それは、これが、神の超自然的な力によって書か

れた、ということです。

66 の異なる書が、40 人の異なる著者によって、1600 年間に亘って、三つの言語で、別々の大陸で書かれたにもかかわらず、全く矛盾するところがありません。

それどころか、最初から最後まで、一つの共通するテーマが流れていて、聖書が神の力によって書かれたものだと感じ取ることができます。

事実、これは神の自叙伝なのです。神が書いた本。

従って、神はご自身の存在を説明しよう、証明しようとはしていないのです。

言うまでもなく、本の著者は存在するのが当たり前なのだから。

創世記は始まりの書。唯一、神を除いて、全ての物事の始まりの事実。

神に始まりはないのだから。

それでもまだ、神が存在する証拠を探すなら、聖書が神の靈感によって書かれたという事実によって、それは明らかです。

では 1 節。初めに、神が天と地を創造した。(創世記 1:1)

多くの人がここでつまづきます。ここで。創世記 1 章 1 節で。

初めに、神が天と地を創造した。(創世記 1:1)

この箇所、ここでやめてしまうのです。

それはまさに人間の問題を象徴しているのですが、オープニング声明に納得できなければ、その後続く文章を受け入れるのは難しいということです。

そういう人たちは、科学的な根拠や理解に基づいて問題を投げかけます。

「おい、まさか本気で、神が天と地を創造したとか、その後の創造物語とかを信じているわけじゃないよな?」「創造の 6 日間? ま、それも素晴らしい伝説かもしれないが…」

「一部の人にとっては便利なたとえ話として使えるかもしれないが、だとしても、そんな話を信じられるワケがない。」などと言う人たち。

それでは最初の最初から説明させてもらいましょう。

今あなたが手にしている聖書、これから学んでいくこの本は、科学の本ではありません。

そうは書いていない。しかし、科学に関する事柄について記述されていることは、全て誤りがなく絶対に真実です。

どんなに優れた真の科学でも、聖書に記されていることに対して反論できるものはありません。

聖書は科学の書物ではないけれど、それでも、科学的な事柄に触れる時はいつでも、この本に書いてあることは全てが完全に真実であると証明できるのです。

全く以て驚きです。

神は預言者イザヤを通して明言しています。

He sits enthroned above the circle of the earth.

主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。(イザヤ書 40:22)

忘れてならないのは、イザヤ書が書かれた時代は、全ての国々の、あらゆる文化の、全世界の人々が、地球はパンケーキみたいに平べったいと信じていたのですよ。

しかし、イザヤ書 40 章ははっきり言っています。

He sits enthroned above the circle of the earth.

主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。(イザヤ書 40:22)

他の誰もが、世界中の誰もが全く疑うこともなく、また、皆が認める歴代の学者たちも知者たちも、ほんのつい最近まで言っていたことは、「神が **Circle** (天蓋=球) の上に座っているだ!?!」「ほら、だからやっぱり聖書は信用できないんだ!」「地球が丸いはずがない!」「球であるはずがない!」ところが、クリストファー・コロンブスが登場して、地球は平面であるという定義を完全に覆しました。

面白い事に、イザヤ書 40 章の「私たちが住むこの地球は丸い」というだけでなく、ヨブ記には、

God hangs it on nothing. 地を何もない上に掛けられる。(ヨブ記 26:7)

「ちょっと待った!!」世界中の様々な国の人々が、何世紀にも亘って言ってきました。

「ちょっと待った! 地球が何もない所に掛けられた!?!」

インドの学者たちも言いました。「そんなワケがない。地球は平らで、巨大な象の背中に括り付けられているのだ。“地を何もない上に掛けられた”と聖書に書いてあるとは何事だ! 地球が象の背中に括り付けてあることぐらい、誰でも知っている!」

哲学的に優れていると高い評価を受けていたギリシャ人でさえ、こう言っていました。「地球はギリシャ神のアトラスが支えている。彼が地球を背中に乗せて、肩と首とで支えているのだ。」

西太平洋の南洋諸島の人々は、「地球が巨大な亀の背中に乗っている事は常識なんだよ。」

それで、もしあなたが、聖書が書かれた時代に世界中を旅行したなら、「地球が丸くて“何もない上に掛けられている”だなんて、それはおかしい。科学的じゃない。気が狂っている。」と言われたでしょう。

しかし学べば学ぶほどますます、聖書がいつも正しいという事が分かってきます。

ワクワクしますね。

皆さん、これは科学の本ではありませんよ。

それでも、科学について語られる時、科学にまつわる事柄に触れる時はいつでも、聖書が正確で信頼できるという事が証明されるのです。

「ちょっと待った!」と言うんでしょう?

「ジョン、創世記 1 章 1 節については、取り敢えず認めたとしても…」「霊的な真理や神学について語るのはまあ良いとしても、それを事実として今の時代に当てはめることはできない。進化論がこんなに浸透して証明されているのだから。」

覚えておいて下さい。

進化論はよく言っても一つの説にすぎず、完全に破綻しているのも事実で、イエス・キリストを信じず、聖書も読まない非常に多くの科学者たちが進化の仮説に走ったのです。

しかし、進化論は内側から完全に破綻してしまっており、穴だらけで、膨大な問題を抱えています。

哲学的にも問題があります。それは、“起源”という問題。

仮に進化論の一つを取り入れたとして、仮に誰かが「私は進化論を信じる。全てのものは進化してきたのだ。」と言ったとして、では、何から進化したのか。

進化には、その元となるものがあるはずで、あなたが信じる進化論をどこから展開させるにしても、何かが最初にあったはず。

その最初の“何か”は、どこから来たのでしょうか？

進化の段階を経るには、最初の“何か”がなければなりません。

何も無いところからは、あり得ないのです。

多くの仮説、進化のはしごの元の元の元を辿っていくことはできるでしょう。

だけど、“最初のもの”がどこから来たのかを探してどれだけさかのぼったとしても、スタートに何を選んだとしても、進化の始まりとなる起源は何か、という問題を解決しなければならないのです。

「ジョン、残念だけど、それは、アナタにも同じ問題じゃない？」

疑い深い人は、私にそう言うでしょう。あなたにも。

「あなた達は、全ての始まりは神だと言うのですね？」〈はい。〉

「だとしたらお聞きしますが、神はどこから来たのですか？ 神の起源は何ですか？」

神に起源はありません。

神は最初から在り、今も在り、これからも在るのです。

「何だ、それは!?! そんな理屈は受け入れられない。」「そんなこと、信じられるワケがない。」「神が初めから存在したと信じているなんて、気が狂っている。」「神にも元となるものがあったはずだ。」

そこで私は一步譲って言います。「そうですか。じゃあ、そうしましょう。真実ではないけど、そういうことにしておきましょう。それは真実ではないけれど、議論を進めるために取り敢えず同意するしましょう。」

それで、もし神も何かから始まったとするならば、それを真実とするなら、神はご自分を創ったものに対して責任があります。

真実ではないけれど、議論のために取り敢えず、もし神が他の神、もしくは他の造り主から出て来たとしたら、神はそのものに対して責任があり、それは神の問題です。

だから、誰かが第 1 原因論を用いて私たちに反論するなら、「それは神の問題です」と言うだけのこと。もし何か神を創ったのなら。

でも真実は、神が私たちを創造しました。ですよね。

それで、私たちには今も尚、私たちを創った方に対して責任があります。

やっと論点の大もとが見えてきました。

ローマ書 1 章。

ここはまさしく核心が書いてあり、パウロは聖霊によってこう明言しています。

もしこの箇所をご存知ないなら書き留めて下さい。

なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。(ローマ書 1:21 新共同訳)

つまり、創造主がいるということを知りながらもそれを認めたがらず、ローマ書 1 章によると、彼らは“意図的に”真実を捻じ曲げ、握りつぶしてしまいました。

なぜでしょうか？ それは、人間は責任を負いたくないからです。

更に続いて、

神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。

(ローマ書 1:25 新共同訳)

彼らはしてはならないことをするようになりました。(ローマ書 1:28 新共同訳)

人間は、悲しい悲しい本性、墮落した欲望に従うようになってしまいました。

それが問題の核心です。

もし私が創造主など存在しないと言え、創造主に対する責任もなくなるわけで、私は何でも自分のしたいようにできるのです。

進化の仮説による過程を通して、もし私が動物王国から来たのなら、私がスライムから進化したとするのなら、私はいつもスライムのように振る舞うことができ、スライムの中で生きることができます。

犬のように生き、豚のように死ぬ。

誰も言いませんが、皆さんも私と同じですよ。分かりますか？

私が何かベタベタ、ヌルヌルしたものから発生し、それから動物園に来て、そして今の私、今のあなたになったのなら、私たちはこう言うでしょう。

「おい！ 邪魔しないでくれ！ 俺はパーティーアニマルなんだ。」「パーティーだ！」

「宴会だ！」「何でも自分がしたいことをやるのさ。神なんてものは存在しないから。」「俺はベタベタ、ヌルヌルしたものからできたんだから。」

ローマ書 1 章によれば、これが本当の問題なのです。

生来、本能的に神は存在すると知っているのに、それでいながら神を神として認めたがらず、そのため事実を捻じ曲げて、様々な闇の行いに身を投じる。

進化の仮説は、第 1 原因論の問題を論じているのではなく、実は、ローマ書 1 章に書かれてある通り霊的な事実、捻じ曲げられた事実が根本にあるのです。

では、捻じ曲げられた事実とは何でしょう？

ローマ書でパウロは言いました。

神の永遠の力と神性は被造物に現れており (ローマ書 1:20 新共同訳)

詩篇 19 篇では、天は神の栄光を語り告げ (詩篇 19:1)

話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。(詩篇 19:3)

できれば天や地に現れた神の栄光について、宇宙のことやあんなこと、こんなこと、私の中の世界がひっくり返って、創造主は絶対に存在する、創造主なしにはあり得ない、とすっかり納得したことなどを、あれもこれもお話したい。

でも今日は、その誘惑と戦って話しません。それはまた別の機会に話すとして…

天は神の栄光を語り告げ (詩篇 19:1)

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって (ローマ書 1:20)

パウロは言いました。『創造主は存在する。』

しかし、人間がこの真実を曲げ、責任を負う事を拒んだのです。

進化論は破綻していて、進化の起源の問題について解決できません。

加えて進化論は、科学の最も根本的な基礎、誰もが知っている最も重要で基本的な科学の法則を犯していることによって、破綻しています。

科学の世界で最も重要な法則の一つで、全ての科学の基礎となるのは“熱力学第 2 法則”

「熱力学第 2 法則って何だ？」

これは哲学でも理論でもなく、基礎となる法則、根本的な原理であり、これを基に全ての科学は成り立っています。

簡単に言えば、全てのものは秩序から無秩序へ移行する。“全て”です。

これは自分の目で簡単に確かめられます。

あなたのティーンエイジャーの子供の部屋を見てごらんください。

お母さんが中に入って掃除や整理整頓をすることはできるでしょう。で、どうですか？

部屋の秩序は、また無秩序へと移行するのです。

板とビー玉を用意して、ビー玉で馬の形を作り板の上に載せます。平らな板の上に。

そしてそれを愛車の後部座席に置いて 30 分間、時と空間を駆け抜けるように街中を走り回ったらどうなりますか？ 車を止めた時、馬は元の形を保っているのでしょうか？

それとももっと緻密に仕上がっていたり、もっと芸術的に整っていたりするのでしょうか？

大量のビー玉が座席の隙間に入り込んだり、そこら中に転がっているでしょう。

何が起こるのかというと、このように、全てのものは秩序から無秩序へ移行するのです。

全ての科学はこの事実の上に成り立っていて、進化論はこれに反します。

進化論は、全てのものが無秩序からより優れた秩序へ、単純から複雑へ移行する、と明言していますから。

おかしい。

だから、非常に多くの科学的に物事を考える人たちは、彼らは科学に対して真摯な人たちですが、「進化論には無理がある。明らかに熱力学第 2 法則に反している。」と言っているのです。

万物はそのようには作用しません。更に秩序あるものにはなっていません。

より複雑なものへと変化していません。

逆に全てのものが後退してきています。

「ジョン、それはあなたの考えで、多分何人かの科学者もそうなのかもしれないけど、それでも多くの大思想家たちが、まだ進化論にこだわっていますよね。」

歴代の、科学を支持する偉大な学者たち、雑誌ディスカバー誌で、先駆者ナンバーワンとしてランク付けされているアインシュタインやレオナルド・ダ・ヴィンチ、その他歴史に名を残した数々の大物の中でも優れて科学的な思考を持っていたのは、ディスカバー誌によるとアイザック・ニュートン博士です。

しかし、彼は笑い者になっていました。

当時の人たちが、彼が信じていたことを信じられなかったからです。

それは、神が 6 日間で天と地を創造したということ。

ニュートンは創世記 1 章の話を信じていました。それを信じていた。

それで人々は、彼を短絡的思考だとバカにしていたのです。

ある日、ニュートンは太陽系のモデルを作りました。

それは精密にできていて、彼は自分の家に設置して、友人である研究仲間の科学者たちを招きました。ある日の午後、やって来た科学者たちは、そのモデルが詳細に亘って精巧にできているのを見て大変驚き、「おい、アイザック!! どこでこれを手に入れたんだ!?!」〈どこからも。〉「ってことは、自分で作ったのか!?! すごいヤツだな!!」〈作ってないよ。〉

「ちょっと待てよ。買ったのでもなく、作ってもないとしたら…そうか! 誰かから貰ったのか!?!」〈いや。〉

「じゃあ、アイザック、これはどこから来たんだ?」〈どこからも。〉

「どこからもって、どういうことだ!?!」〈ただそこに現れたのさ。〉

〈僕は買ってもし作ってもなくて、誰かが置いて行ったのでもない。ただそこに現れたんだ。〉
そして突然、彼らはニュートンが言おうとしていることを理解したのです。

つづく

知識もなしに言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。

さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。

わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。

わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。

分かっているなら、告げてみよ。

あなたは知っているはずだ。

だれがその大きさを定め、だれがその上に測り縄を張ったかを。

その台座は何の上にはめ込まれたのか。あるいは、その要の石はだれが据えたのか。

(ヨブ記 38:2 - 6 新改訳 2017)